

私の認知症治療

老人性認知症センター活動

順天堂大学浦安病院 メンタルクリニック 教授

一 宮 洋 介

老人性認知症センターは平成元年に厚生省（当時）が老人性認知症対策（高齢者保健福祉推進10ヵ年戦略）の一環として開始した事業で、都道府県が指定基準を満たした総合病院などの施設に設置してきました。平成15年には全国に158施設となっています。

順天堂大学浦安病院に老人性認知症センターが設置されたのは平成6年です。認知症に関する相談と診断および治療を行っています。これまでに当センターのパンフレットを保健所、市役所、病院などに配布設置し、またインターネットのホームページや講演会でその活動内容を地域に情報提供してきました。センター開設当時の浦安市は人口の高齢化率6%で、高齢者の少ない若者の街とタウン誌に紹介されていました。しかしその後人口の高齢化が急速に進み、現在高齢化率は8・9%に達しています。このような状況の中、センターへの相談件数は増加の一途で、相談内容の大部分は「認知症なので

はないか」という初期の診断を求めるものです。相談件数の70%前後が、専門医の診断と治療を求めて外来を受診され、その平均年齢は75歳です。浦安市の介護老人福祉施設認知症フロア入所者の平均年齢が85歳ですから、慢性進行性疾患である認知症の経過の前半に関わっていることとなります。現在月200名前後の認知症の方々の診療を行っています。ほとんどが初期から中期で、基本的に在宅で、外来通院が可能な方たちです。

治療的には、アルツハイマー病の場合、薬物療法はアセチルコリンの補充療法が唯一認可されているわけですが、薬物療法以外のアプローチとして認知リハビリテーションや個別ケアが行われ、効果をあげています。当科外来では、薬物療法と並行して認知機能を強化するための脳機能の活性化を勧めています。読み、書き、おしゃべり、散歩の実践を推奨し、新聞の大見出しを声を出して読み、ノートに書き写すよう

指導しています。自分から楽しんで取り組まれる方に効果があるようです。

認知症の症状が進行し、介護老人保健施設などを利用するようになると、その施設を運営している医療機関に転医されるため、その後の経過は分からなくなります。以前、浦安市の介護老人福祉施設認知症フロアの入所者の診察を行っていますでしたが、そのときの入所者35名中にセンターが関与した症例が4名いらっしゃいました。しかし当時はセンターでの診断や検査所見

治療経過などの情報は施設に存在せず、ADLの程度と感染症の有無が重要な情報として取り扱われていました。個別ケアを行うためには、個人の生活史や現病歴が重要なことはいうまでもなく、老人性認知症センター、介護老人保健施設、介護老人福祉施設との医療連携、情報共有の推進が望まれます。もちろん、認知症では治療経過の前半と後半では、必要なサービスの内容が医療モデルから生活モデルに切り替わる

わけで、ADLや感染症の問題が重要であることはいまでもありません。

最後に今後の課題としては、認知症の家族、とくに配偶者に対する精神的なサポートの充実があげられます。混雑する外来で本人の診察に加えて、ご家族のサポートに時間を作ることはなかなか難しく、老人性認知症センター活動の一環として、家族会やグループミーティングのような形がとれるとよいのではないかと考え、コアとなってくれるスタッフを探しているところです。

